

第三百三十六回 青葉会

平成二十六年三月二十七日（木）

午後六時〜九時

丸紅来客食堂（談話室）

〈選者〉

☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 久米五郎太 後藤保明（新人） 小西弘子

〈投句〉

豊田ゆたか 中野一灯 山崎亜也 山内天牛

〈紙上選句〉

伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇 宮内規雄 渡邊盛雄  
赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 橋口隆 早川允章 福島正明 星田啓子 村田くに子

山崎青史 山本三恵

《選者吟》

兼題『お水取り』『啓蟄』『新入社員』含む当季雑詠五句。投句二句

万里子（忠・孤・ゆ・隆・天・三）

啓蟄やいつまで続く独り旅

全（五・く）

轉りの目覚め早める雨上り

全（猛）

卒業や振袖の娘（こ）を目守（まも）る父

全（五）

遠近の句友から日々花便り

全

《互選句》

七点

☆ うららかや土手がすなはち外野席

恵洲（万・堅・恭・忠・弘・灯・青）

☆ 母の忌へひとり読経や春火桶

盛雄（万・忠・弘・ゆ・灯・啓・天）

河東節の会

六点

春雨や師の声三味線（しやま）のやはらかき

紀久男（恭・ゆ・灯・隆・啓・亜）

草くぐり来し水音や野蒜摘む

一灯（龍・允・啓・く・亜・青）

（青：水音がくぐって来たという表現が卓抜）

船頭の外るる唄や日もうらら

亜也（弘・ゆ・隆・正・啓・天）

（正：中七下五「外れし小唄春うらら」では？）

五点

☆ 夜桜や灯影（ほかげ）を映す茶碗酒

ゆたか（万・堅・龍・允・く）

栄螺焼く七輪あふぐ朝市女

一灯（孤・允・正・青・天）

啓蟄や杖突き友の現はるる

規雄（弘・保・龍・隆・三）

顔一杯春をうかべて友来る

猛（堅・弘・く）

「草紙洗小町」

春の舞遠山染むる朝ぼらけ

五郎太（堅・紀・三）

大木の辛夷に向かひ第一打

全（恭・青・三）

☆ 椿落つ昨日の椿の横へ落つ

弘子（万・猛・忠）

お水取り足を踏み踏み火の粉待つ

保明（灯・亜・青）

☆ 句友また酒友でありぬ春燈下

恵洲（万・保・允）

清冽な日々を生きたし利休梅（夏の季語）

ゆたか（堅・紀・弘）

騙し絵の街を照らすや春の月

正明（孤・灯・亜）

（や はるこ みしせ）

二点

友が家に春子天婦羅三年ぶり

紀久男（万・猛）

（春子＝春椎茸のこと）

朧夜の友によばれし祇園かな

全（天・三）

春時雨夕暮の街静まれる

恭延（五・保）

杏咲く庭に広がる元氣あり

全（猛・龍）

孫好む百円シヨップの雛人形

忠彦（猛・灯）

☆ 啓蟄やシャンパンの泡長く立て

五郎太（万・正）

「二人藤娘」

手踊りの近江八景初桜

弘子（堅・隆）

「身替座禪」

鬼平が悋気の女房春狂言

全 (紀・孤)

☆ 浦波の光る風浜白子(しらま)干す

一灯 (万・ゆ)

拜火教の心受継ぐお水取り

正明 (紀・孤)

義経の不死伝説や黄砂降る

昇 (孤・青)

(青…義経ジנגスカン説に黄砂がうまくついている)

☆ 春愁ひ訪ふ町は廃市てふ(柳川)

亜也 (万・恭)

(☆…上五↓「春愁や」)

啓蟄や心そぞろに旅支度

全 (隆・允)

新品の靴を喜ぶ兒にも春

天牛 (保・く)

飛花落花少年いつか老いにけり

盛雄 (五・垂)

吉野路の旅程決まるも余寒あり

そらお (く)

玉三郎・七之助の「二人藤娘」

うつなやたはむれあそぶ藤の精

紀久男 (五)

啓蟄に顔出しかねる寒さかな(季重なり)

猛 (五)

春一番和服の人を翻弄し

全 (天)

春寒しビルの谷間の交差点

恭延 (保)

啓蟄や己も庭に陽を求め

全 (紀)

轉りや人声消えた避難地区

忠彦 (紀)

初桜高枝揺らす鳥をり

五郎太 (恭)

壁にある醍醐の桜時止める(山種美術館)

全 (保)

(孤…絵に描かれた桜なら、季感に乏しいと思ふ。「絵に描いた餅」のように)

春日浴び水かけ不動も人心地

保明 (猛)

花曇富士の頂き桃色に

全 (龍)

春雷におびえる仔犬抱いてやり

全 (忠)

春の猫尻尾くねらし心地よげ

全 (恭)

忠告は要らざることか鳥雲に

健介 (紀)

彼岸日の混む空港や子ら去りぬ

全 (正)

新居とてスペイン瓦の雀の巢

弘子 (龍)

禁酒明け肴手筈の春の宵

堂哉 (紀)

お悔み状筆先にじむ春夕べ

ゆたか (啓)

啓蟄や己が殻捨て丘歩む

全 (啓)

ハンマーの打音検査や冴返る

一灯 (ゆ)

花うぐひそよぐ水藻に見え隠れ(大垣)

全 (垂)

啓蟄や友より電話頻繁に

規雄 (允)

☆ 舟で行く堀向く家並みの雛飾り(柳川)

亜也 (万)

☆ お水取青衣(しょうえ)の女(ひと)の出づとかや

全 (三)

☆ 桜餅隅田川向き食ふのかや

天牛 (万)

(「川向き」||「皮剥き」のかけことば。落語の噺)

春疾風手持ち無沙汰の図書館員

全 (正)

同期会新入社員も老いにけり

全 (忠)

柿落三月掉尾玉三郎

全 (紀)

●次回青葉会

四月二十四日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲兼題「八重桜」「通路」「草餅」一句以上 含む当季雑詠五句まで。

投句二句

◎年会費集めます

五月二十二日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

六月九日(月) 川越吟行

平成二十六年三月句会報

一 今回は先生以下12名出席。投句8名。猛さんの進行役で順調に推移。御覧のように恵洲さん、一灯さん、盛雄さんが好成績でした。  
先生からの桜餅、弘子さんの桜饅頭(たねや)、忠彦さんの「獺祭」純米大吟醸(岩国)、小生の「初日」純米大吟醸(津。伊勢土産)など甘辛の名品を賞味しつつ結構盛り上りました。

二 関係者近詠

自詠付き年賀の多さ学ばなむ	万里子	玉垣の内なる静寂(しじま) 梅開く	規雄
思ひなし伸びし日脚や師碑訪はな	全	— NHKラジオ 西村和子選(二月八日放送)	
産土神の若水受くる競歩連	全	立春の日に退院と決まりけり	規雄
歩くため外へ十指を手袋へ	眞希子	— 「NHK俳句」四月号 宇多喜代子選	
熱爛や妻のつつこみ夫のぼけ	全	口髭を蓄へてよりの冬帽子	丹野敦雄
過暖房零を数へて指輪の値	全	— 「俳句」四月号 小笠原和男選(評省略)	
大寒や水道水を信じ飲む	全	花莖仕出しのバイクまだ着かぬ	青史
白菜へまた母の立つ鍋の湯気	弘子	ほどほどに逝きたくなりて花吹雪	全
春めくや紅茶へ返す砂時計	全	皇宮の松の間に間に桜かな	允章
大寒や小さき教會赤き屋根	恭延	日の本はさくらさくらの一ヶ月	全
「義賢最期」の愛之助		ピアノの音日毎軽やかシクラメン	堂哉
息を呑む殺陣をたつぶり初芝居	紀久男	ターナー展港近しく山笑ふ	全
— 「萬緑」四月号 —		冴返る繁くか細き長電話	全
草の芽のいのちは踏まぬ万歩計	盛雄	天魚(あまご) 喰ふ箸の先から春の立つ	啓子
春愁を形にすれば己が影	健介	廃屋になほ散り敷ける花の在り	全
陰雪を避けて急がん芝居見に	紀久男		

— 「きさらぎ句会」三月

三 高橋睦郎の近詠と最近の著書

● 永年選者をしている「銀座俳句」(『銀座百点』の投句欄)に自句も載せておりますが『俳句』二月号に追悼句中心にまとめて発表しております。その一部を紹介しします。

悼 團十郎 二句

飛六方翔り失せたる春寒し  
荒事は老イを許さず冴返る

坂東みの虫改め三津之助急逝五十一歳

みの虫のなき夕空の澄みに澄む

河竹登志夫 小川陽子(獅童の母堂)を喪ふ

曆焚く指折りて彼も彼も亡し

● 『歳時記百話』中公新書2013/12/20 ¥780 (朝日新聞に毎週連載していたもの)

「三・一一忌」の章に二人の被災者の句を紹介しております

四肢へ地震ただ轟轟と轟轟と

膨(ふく)れ這い捲(めく)れ攫(さら)えり大津波

テレビ見る彼ら・地揺らぐわれら原発燃ゆ

終はらぬ世界の終はらぬ汚染虹二重

車にも仰臥という死春の月

原子炉のごとくさびしき昼寝かな

— 高野ムツオ(宮城県)

— 関悦史(茨城県)

「この場合の無季は季を超えているというべきか」と述べております。

平成二十六年四月十三日

紀久男記

以上